

ギュンター・グラスにおけるマイノリティ性の考察
—その多文化世界におけるパースペクティヴ—

依岡隆児

Über den Gesichtspunkt der Minderheiten von Günter Grass
—die Perspektive in der multikulturellen Welt—

Ryuji YORIOKA

Abstrck

Günter Grass ist ein Schriftsteller, der sich stark für die Minderheitenfrage in der Gesellschaft interessiert. Und diese Anteilnahme bezieht sich eng auf seinen literarischen Standort. Trotzdem gibt es wenige Forschungen, die den Grass'schen Standort auf der Minderheitenseite als eine wesentliche Eigenschaft seiner Literatur erklären.

Hier sollen Grass' Beziehungen zur Minderheitenfrage überblickt, und danach soll gezeigt werden, dass sie in seiner Schöpfung wiedergespiegelt werden, womit Grass' Literatur unter dem Gesichtspunkt dieser Minderheiten erklärt werden kann. Dabei sind hauptsächlich seine Redenbücher „Für- und Widerrede“ (1999), „Ohne Stimme“ (2000) und Gespräche mit Kenzaburo Oe (1978, 1990) zu bedenken.

Was seine soziale Tätigkeiten betrifft, hat er für die Luftbomben durch NATO-Armee auf Kosovo wegen des Minderheitenschutzes gestimmt. Und er begründete 1997 die

„Stiftung zugunsten des Romavolkes“. Und er beschrieb in „Zunge zeigen“ Slum-Bewohner in Indien, in „Unkernrufe“ die Heimatlosen durch den 2. Weltkrieg, und in „Ein weites Feld“ Ausländer in Berlin und so weiter. Er hat folgerichtig Minderheiten in seinen Werken zur Sprache gebracht. Woher kommt diese Anteilnahme?

Man kann zuerst den Grund darin sehen, dass seine Mutter aus einem Minderheitenvolk kommt. Von diesen Frühprägungen leitet Grass sein Eintreten für Minderheiten ab. Und als einen anderen Grund kann man vermuten, dass er die Aufgabe des Schriftstellers, die Stimme seiner kriegsgefallenen Kollegen zu vertreten, den Minderheitengruppen ohne gesellschaftliche Vertreter überträgt.

Und dass er die literarische Kraft in der Peripherie, die dem Zentrum widersteht, sieht, ist vielleicht ein weiterer Grund dafür. Seine Schreibhaltung für die Unterdrückten und Bedrückten ist nicht politische Spekulation, und auch nicht nur ethisch. Sogenannte ‚Historie‘ zu relativieren, indem man sie aus der Minderheitenseite sieht, ist gerade eine literarische Funktion. Er schätzt wirklich die ‚Fremde‘ in der Gesellschaft als auch kulturell sinnvoll. Er sieht die Möglichkeit der neuen Literatur in der Kreativität durch die Fremdheit in der multikulturellen Situation. Diese Haltung bezieht sich auf seine literarischen Narrative, die Distanz zur öffentlichen Geschichte hält, und diese Narrative geben seinen Werken eine Weite und die Vielflächigkeit in deren Konstruktion.

Seine Werke sind dennoch jetzt nur als schematisch oder politisch gelesen, da er selbst ein Prominenter geworden ist. Währenddessen droht er die für einen Schriftsteller unentbehrliche Distanz zu verlieren. Also hat er eine Schreibtechnik entwickelt, das heißt, die distanzierende Schreibart, mit der er seinen Standpunkt in einen ‚Außenseiter‘ oder in einen ganz unteren Ort verlegt. Wenn man diese Neigung Grass‘ übersieht, kann man wegen seiner Auffälligkeit in

Massenmedien nur seine politische Ehrsucht und persönliche Eitelkeit sehen. Eher hat Grass jetzt ein Krisengefühl der literarischen Situation gegenüber. Diese Haltung Grass', die die Literatur an die Minderheitenseite stellen will, könnte hilfreich sein, um über einen ‚Standort‘ der zukünftigen Literatur nachzudenken.

序

ギンター・グラスは多文化世界におけるマイノリティの存在に、強いこだわりを持つ作家である。彼は作品の中にもマイノリティを数多く描いている。『ブリキの太鼓』では玩具屋であるユダヤ人マルクスが「水晶の夜」で自殺を遂げるし、オスカル之母方がグラスの場合と同じく、スラブ系少数民族カシューブ人とされていた。『犬の年』では主人公のアムゼルがユダヤ人で、イエニーは「Zigeuner(ジプシー)」に育てられた捨て子だった。また、ユダヤ人ヴァイニングァーが人種法を作ったことに触れ、マイノリティ性へのコンプレックスが過度の体制順応的原理主義に通じることを指摘している。1970年代になってからも、『ひらめ』では女性＝料理女という歴史から疎外された存在がクローズアップされた。80年代でも、『舌を出す』でインドのスラムに自分も半年住んで、そのスラムの最下層の住民たちを描いていた。また、1990年代のグラスの作品を見ても、1992年の『鈴蛙の呼び声』では戦争による故郷喪失者たちが織り成すドイツ・ポーランドの宥和の物語に、移民のベンガル人チャタジーが登場し、アジアが古いヨーロッパを救うという多文化的世界を描いている。また、半ばドイツ人で半ばポーランド人であるブラクブはダンツィヒの失われてゆく方言を話し、希少価値となった文化的伝統の保持者であるとともに、現実社会に対する透徹したまなざしをもつリアリズムを身につけている存在として描かれていた。1993年の詩集『十一月の国』は再統一後の外国人憎悪と外国人襲撃事件をテーマとした。1995年の『はてしなき荒野』ではベルリンの外国人、特にトルコ人が登場し、ベルリンが「トルコ人の町」としても描かれた。さらに、フランス系移民のユグノーの子孫たち(フォンターネ)によるプロイセンにおける文化的貢献が述べられてもいれば、画家リーバーマンへの言及など、ユダヤ問題も忘れられていない。1999年の『私の一世紀』、2002年の『蟹の横歩き』でも、東方難民となった者たちの運命とユダヤ人問題が扱われている。このように、グラスは一貫して作品の中でマイノリティを描いてきた。

グラスのこうしたマイノリティへのこだわりはどこから来たのだろうか。また、それは彼の文学性といかに関わっているのだろうか。グラス研究においては、しかしながら、従来、彼がこうしたマイノリティの立場に立つとする見方は、その社会活動における紹介という域を出ず、その文学との関わりで論じるものは少なかった。

例えば、その個別の作品におけるシェルム、あるいはピカロとしての登場人物の設定や、ユダヤ人、ねずみといった形象を分析し、そこに社会的アウトサイダー性を見、異化的効果を指摘するという類のものがほとんどで、それらはグラス自身のマイノリティ性を論じているとはいえない。代表的なノイハウスによるグラス評伝も、たとえば『はてしなき荒野』の背景に外国人襲撃事件があったとの解説はあるが、グラスの文学におけるマイノリティ性の重要さについては論じていない。¹

そこで本論では、グラス文学の本質をこのマイノリティ志向から説明することを試みたい。その際まず、グラスのマイノリティ性との関わりを紹介し、次に、それと彼の文学との関連を明らかにし、さらにそれが具体的に創作活動にも反映、あるいは、影響していることを示す。ちなみに、ここでいう「マイノリティ性」とは、マイノリティ、すなわち、社会的少数者や少数民族の出であることや、マイノリティ擁護の社会活動をしているということだけではなく、その文化的機能として、社会の支配的言説に対抗的で、マイナーな側に視点を置いて描く傾向も含めて考えている。²テキストとしては、講演集『賛成・反対』と『声もなく』、さらに大江健三郎との対談を中心に、検証する。

1 「移民」グラスと多文化社会

グラスのマイノリティへのこだわりの理由として、まず、彼自身の出自にその理由があることが考えられる。彼の母方はカシューブ人というスラブ系少数民族だった。その母方の民族についてグラス自身は、「ドイツ人から軽蔑され、中央支配的ポーランド国家からマイノリティとして、十分認知されず、彼らは肩身の狭い思いをしながら生き続けてきた。しかし、彼らはずっと昔から、そうだったのである。数百年前に定着してからは生き延びる術を身につけてきた。

¹ Neuhaus, Volker: Schreiben gegen die verstreichende Zeit. Zu Leben und Werk von Günter Grass. München 1997.

² 一般にマイノリティとは、少数民族、移民、難民、亡命者、外国人労働者、など政治的被迫害者・社会的弱者を意味する。

繰り返し、歴史はこうした彼らの頭の上を通り過ぎていった。そして、悪い時代がくると、彼らは身をすくめるのだった」³と述べている。カシューブ人はナチスには Volksdeutsche (=特にドイツ、オーストリア以外に在住のドイツ系住民) とは認められなかったが、ポーランド人にも数えられなかった。しかし、彼らが社会の周縁グループとして軽蔑されていたのは、第三帝国の時代だけではないのである。せいぜいで、隅に追いやられるか、もっとひどい場合には迫害された。こうしたこの幼い頃受けた印象が、グラス研究者のマイヤー＝イスヴァンディの言うように、グラスにとってマイノリティ、特に、ロマ(ジプシー)のために尽力するきっかけになったと考えられる。⁴また、ダンツィヒの多文化的雰囲気の影響もあっただろう。グラスは、1927年にダンツィヒに生まれた。この町は、現在ではポーランドに属するバルト海沿岸の港町で、今はグダニスクと呼ばれている。しかし、もともとは中世のハンザ都市のひとつで、自由市であったが、グラスの生まれた頃は、北欧、東欧、ロシアやポーランド、ドイツなどから人々が集まる国際都市だった。

グラスの生まれた1927年当時のこの町については、自伝的色合いも濃い小説『かたつむりの日記から』には、こう書かれている。

「私は、そうだよ、自由市ダンツィヒに生まれたのだよ。その町は第一次大戦後ドイツ帝国から分離され、近接する地域とともに国際連盟の管轄下に置かれた。憲法第七十三条には、こうある、『自由市ダンツィヒに住むすべての市民は法の前に平等である。例外法規は認められていない』。(中略)しかし、(1928年8月の人口統計によれば)自由市の四十万以上の市民(その中には、二歳たらずの私も入っていたのだが)の中には一万四百四十八人のユダヤ人も登録されて住んでいた。彼等の内、改宗したのはごくわずかであった」。⁵

このように、当時のダンツィヒは国際連盟の管轄下に置かれ、ダンツィヒ市民としてドイツ人とポーランド人が主として住む町であった。そこにユダヤ人とかスラブ系少数民族(グラスの母方のカシューブ人など)の人々が混入し、共存する形態をとっていた。グラスは多文化都市ダンツィヒで、比較的寛容な多文化的環境の中で育ったといえる。

マイノリティ支援の社会活動では、たとえば、グラスは1984年にハインリッヒ・ベルらとともに、外国人支援のための同盟‘WIR’のメンバーになったし、1992年には国境を超えて活動するドイツとポーランドの芸術家支援のため

³ Mayer-Ischwandy, Claudia: Günter Grass. München 2002, S. 17f.

⁴ Mayer-Ischwandy: Günter Grass, S. 18.

⁵ Aus dem Tagebuch einer Schnecke. Darmstadt 1985, S. 15.

の「ホドヴィエツキ賞財団」を設立した。ホドヴィエツキはグラスと同じダンツィヒ生まれで、「ヨーロッパ人」と呼ばれた版画家で、ヨーロッパ各地を転々として活躍した初期啓蒙主義者だった。またグラスは、再統一後のドイツにおける外国人排斥の風潮へのもっとも厳しい批判者だったし、さらに、NATOによるコソボ空爆支持を苦渋の末に決断した論拠も、少数民族保護だった。1999年のノーベル文学賞受賞でも、虐げられた者たちのために書いてきたとして、その賞金の一部をマイノリティの文化保護のために寄付すると述べていた。

この延長線上に、1999年の「ロマ民族のための財団」設立があるのは言うまでもないが、この「ロマ民族のための財団」委託で、さらに、ロマ出身の芸術家を支援する「オットー・パンヨーク賞」を制定した。パンヨークとはグラスの美術学校での師で、ロマを戦時中、保護しようとした画家・版画家だった。彼は『ブリキの太鼓』の第三部に登場する美術学校の教師クーヘンのモデルである。ちなみに、ロマのことは、小説『犬の年』でもすでに取り上げられていた。そこでは、捨て子のイエニーはロマ（ジプシー）の子として育てられたが、やがて教師のブルニースに引き取られ、バレリーナになった。その彼女が2003年の短編小説『蟹の横歩きで』にも再び登場している。

そればかりか、グラスはロマのための支援活動を積極的に行ってきた。例えば、講演集『声もなく』⁶（以下、OSと略し、その頁数を示す）はロマ支援のための三つの講演を集めている。（Ⅰ「私はいかにして財団設立者になったのか」は1997年、リュubeckでの「ロマ民族のための財団」設立時の講演で、Ⅱ「声もなく」は2000年、ストラスブールでの「人種主義に反対するヨーロッパ会議」での、Ⅲ「未来の音楽、あるいはごみ虫だまは語る」は2000年、ヨーロッパ投資銀行においての、それぞれグラスの講演）グラスはまず、芸術家にはアウトサイダーの役割が課されているとしてから、(OS I, S. 8) ロマ擁護のいきさつを述べ始める。そのきっかけはデュッセルドルフ美術学校の教師オットー・パンヨークがロマを好んで描き、その「あらゆる迫害にも関らず美しい」存在を理解することを教えてくれたことだったとする。(OS I, S. 21) 戦時中のユダヤ人虐殺は、現代人に深く刻印されてきたのに、同じように強制収容所で殺害されたロマたちのことは、ついでにしか触れられてこなかった。五十万とも十五万ともいわれるその犠牲は、民族虐殺とは言われぬのか、とグラスは問いかける。(OS II, S. 73)

⁶ Grass, Günter: Ohne Stimme. Rede zugunsten des Volkes der Roma und Sinti. Göttingen 2000.

「死者としてすら、ロマの人々は蚊帳の外である」(OSII, S. 73f.)として、グラスは最近のベルリンにおける中央記念館設立の件に苦言を呈している。この「人種主義の狂気の犠牲者たちのための記念碑」(OSI, S. 14)には、殺されたロマたちは「しぶしぶと、言い訳を並べながら、やっと、いわゆる補欠人名簿に載せてもらえた」とする。(OSI, S. 14) ナチスの民族虐殺においてユダヤ人以上に「マイノリティ」であったロマは、いわば「マイノリティの中のマイノリティ」だったというわけである。

現代においても根強いこうしたロマやシンティへの差別は、たとえば、議会で議席権が与えられなかったり、自民族の文化が教育される機会に恵まれなかったことから、いつそう悪化している。こうした事態に対してグラスは、具体的に、ヨーロッパ議会に対してはロマに議席を与えることを提案し、ヨーロッパ投資銀行に対しては、ロマのための教育促進に投資することを提言する。(OSIII, S. 92)

ヨーロッパに二千万人いるとされる、この「ヨーロッパ最大のマイノリティ」は議会にロビーも出せない「声なき民」である。(OSII, S. 35) 社会で無視されている彼らは、「ヨーロッパの意識における盲点」(OSIII, S.71)である。書き言葉を学び、同じ民族出身の教師が教えることができ初めて、彼らは民族として正当な自己主張ができるようになる。そのためにロマの言葉を学校で教えることが大切だ、というのである。(OSIII, S. 85)

さらに、ロマやシンティたちが選挙のための住民登録を拒否するのは、彼らがナチス時代、登録されてから強制収容所送りにされたという苦い経験のゆえであるとし、(OSIII, S. 72f.)過去が現在にまで長く暗い影を投げかけていることを指摘する。グラスは、にもかかわらず、ロマやシンティたちに住民登録し、選挙で議会に議席を得て、教育を促進するように呼びかける。⁷それはロマ・シンティこそ、真のヨーロッパ人であり、ヨーロッパの人々は議会において彼らの声を聞くことで彼らから多くのことを学びうると信じているからである。「生まれつきのヨーロッパ人として、彼らは数百年にわたる経験から、私たちに国境を越え、さらには私たちの中と周囲にある境界を止揚し、単に日曜日の演説で主張されるだけではなく、正真正銘のヨーロッパを作ることを教えることができるでしょう。このヨーロッパは外に向かった『砦』となるべきではあ

⁷ 参考：小川悟 『ジプシー～抑圧と迫害の轍』 明石書店 1990年。これは、再統一後のジプシーの問題を論じているが、それによると、グラスの発言とは裏腹に、ジプシー自身による公民権獲得のための運動はすでに存在している。

りません。内部において将来は、砦のメンタリティが支配することのないようにすべきです。このメンタリティが支配するようになると、現在、日々見聞するように、『砦』の凶暴さがいたるところで徘徊し、民族憎悪を鎖から解き放ち、外国人に対する暴力をかき立てることとなるでしょう」(OSⅢ, S.93)と述べ、⁸ヨーロッパ連合の成否がこのロマ・シンティ問題への取り組みと裏腹でもあるとの見解を示している。

こうしたグラスの主張の背景には、1998年の新国籍法が出生地主義から訣別して、二重国籍を条件づけで認めたが、これに対してDDU/CSU(同盟)が強硬に反対キャンペーンを展開していたことがある。外国人問題は総選挙のたびに左右の陣営で政治問題化し、大きな争点とされていた。グラスにはCDU/CSU(同盟)などによる移民・亡命者政策の強化の要求への危惧もあった。極右勢力の伸張に対して同盟はNPDの非合法化を主張するが、それに対してグラスは、一部のスキンヘッドを排除しても問題の解決にはならない。むしろ、その背景にいる同調者たちの存在が問題だとした。(OSⅡ, S.27)この発言の裏には、同盟の首相候補シュトイバーが「ドイツ人の血が混ざる」ことを警告していたことへの牽制の意味もあった。また、2000年のグリーンカード制度導入に対しても同盟側の反発(「インド人の代わりに子どもたちを」)も起きた。これに対して、以前はNPD禁止を訴えていた側が今や人種政策を推進しているとグラスは批判している。(OSⅡ, S.28f.)しかし、与党側のSPDに対してもこうした極右の伸張を許したのが1992年の亡命権制限の容認決議だったとも批判している。また、SPD/緑の党によるグリーンカード制度についても、税負担となる亡命申請者とそうでない者とを「選別」という方法をとっており、まさにナチスの「人種政策」をなぞっている、とした。(OSⅡ, S.31)

このように、外国人問題についても、SPDよりさらにラジカルに開かれた政策を主張するグラスはロマ・シンティ問題を、これからのヨーロッパ世界が外に対して自らを閉ざすことなく、平和共存するための試金石であると捉えている。「声を持たぬ」マイノリティであるロマには、国境を越えてゆく「可動性」(OSⅠ, S.20)があるとし、この「可動性」が、移民排斥によってヨーロッパが外に対して「砦」となることを防ぎ、内に対しては、社会的マイノリティの排除と「砦」のメンタリティ支配がないようにするために、不可欠なものであ

⁸ Grass, Günter / Hildebrandt, Regine: Ein Gespräch. Schaden begrenzen oder auf die Füße treten. Berlin 1993, S.14.にも、この「砦のメンタリティ」への言及がある。

るとしている。

ロマ差別を歴史の連続性の中で捉え直そうとする彼の姿勢もここから見えてくる。彼のマイノリティへのこだわりは、単にみじめな境遇の人々への同情とかその生き様への共感といったものにとどまるものではなく、そうした存在に、多くの人々が見過ごしているか、見ようとしないが故に重大な、歴史と現代社会の問題が集約されていると考えるからである。歴史の悲劇はいつもこうしたマイノリティ性を黙殺することによって助長されてきたし、そうした歴史は過去のことではなく、今も継続している。ロマが「ヨーロッパ人の意識の盲点」であると言うのは、なにより現在のロマたちの境遇がナチスによる民族虐殺の記憶やヨーロッパ的世界認識の限界と決して無縁ではないと彼が考えているからである。

2 越境の想像力/創造力

サルマン・ラシュディは、「グラスは移民」とし、彼を「移民文学の中心的意味を持つ作家」と呼んでいる。彼は、移住は二十世紀の包括的メタファーであるが、グラスの場合は自分の過去からの移住と、古い Ich から新しい Ich への移住という二重の移民である、としている。⁹

ところが、ラシュディがグラスのことを「移民」と称したのと同様に、グラスもラシュディに、文学者としてこの敗者の側にいる移民という点で、強い親近感を抱いていた。ラシュディについて彼は「喪失を味わうこと、あるいは、敗者の側に属していることが、文学のよい前提であることで意見が一致した」と述べている。¹⁰ ちなみに、グラス自身は故郷喪失者としての「移民」に対して、すでにかなり早い時期から親近感を抱いていた。1965年のギュンター・ガウスとの対談で、好きなタイプの人間は誰かと尋ねられて、彼は「もっとも難しい人間、もっとも見通しがきかない人間、つまり移民たちである」と答えている。世界に散らばっていった移民たちはドイツでは軽蔑の対象にされがちだが、「しかし、全体としては、私たちの歴史と結びついている彼らは、まとめて言いますと、私の心をもっとも揺れ動かすタイプの人間なのです」と述べている。

⁹ Rushdie, Salman: Ein Reisender über Grenzen im Ich und in der Zeit.(1985) In: Günter Grass im Ausland. Frankfurt a. M. 1990, S. 177.

¹⁰ Grass, Günter: Mir träumte, ich müsste Abschied nehmen. In: Gesammelte Werkausgabe in zehn Bänden. Bd. X, Darmstadt 1987, S. 364.

11 したがって、グラスが作家としてスタートした当初からすでに、マイノリティの境遇に置かれた「移民」たちに、忘れてはならない歴史を過去から我々のところへ運んでくる存在を見、文学創作においてもその視点を一貫して自分のものとしてきたことが明らかとなるだろう。

このように、グラスを「移民」と捉え、そこからの創造力を指摘する声もいくつかあるが、次にここでは、グラスのマリノリティ性を、1990年代に彼が行った講演などでドイツにおける外国人問題との関わりを中心に見てゆき、それがマルチ・メディア化し、多文化的になった現代社会におけるグラスの作家としての立場に関わるものであることを、より具体的に示してゆきたい。

マイヤー＝イスヴァンディが言うように、ドイツ再統一が成った1990年代は、グラスにとって、「ドイツにおける外国人と移民の政策、ならびにマイノリティの役割との関連で社会的・政治的活動をした」¹² 時期だったと言える。彼が1993年のSPDによる基本法の亡命権修正決議に抗議して脱党した事件などは、そのことのひとつの現われである。グラスの講演集『賛成・反対』¹³（以下、FWと略し、その頁数を示す）は1990年代の三つの講演「喪失について」（1992年）、「立場について」（1997年）、「学ぶ教師」（1999年）を含み、こうした外国人・移民問題、マイノリティ問題をもっとも明確にテーマとし、またそれを文学的創造力との関わりでも論じていると考えられる。

まず、この中の最初の講演「喪失について」は、1992年11月18日、出版社グループ・ベルテルスマンの企画「ドイツについての講演」シリーズの一環として、ミュンヘンで行われた。副題は「統一ドイツにおける政治文化の没落について」である。この講演の背景にはロストックでの外国人襲撃事件とSPD党大会での亡命権制限決議、そして敬愛するヴィリー・ブラントの死があった。基本法の亡命権制限は外国人急増に対して行われたとされるが、それでも外国人襲撃事件は収まらなかった。

グラスはこの間、西側による東側の吸収合併という形をとった再統一に反対の論陣を張り、大方のマスコミを敵にまわしていた。再統一は基本法に則って憲法改正の上でなされるべきなのに、実際にはそうはならなかった。こうした状況に対して、彼は西側が東側を援助することによる「負担調整」を提案した

11 Grass, Günter: Manche Freundschaft zerbrach am Ruhm. In: Gesammelte Werkausgabe in zehn Bänden. Bd. X, S. 23.

12 Mayer-Iswandy, Günter Grass, S. 196f.

13 Grass, Günter: Für - und Widerworte. Göttingen 1999.

(1989年12月のSPD党大会)が、取り上げられなかった。

そして、グラスが懸念したように、経済的不安定の中、社会は右傾化し、外国人襲撃事件が続発した。1991年9月にはホイヤースヴェルダで外国人労働者宿舎襲撃事件が、1992年8月にはロストックで外国人宿舎放火事件が、それぞれ起こった。さらに、この講演の直後(11月23日)には、とうとうグラスの住むところに近い町メルンで、トルコ人住宅放火事件が起き、トルコ人女性三人が焼死した。ちなみに、この講演の最初の出版¹⁴の際には、この三人の焼死したトルコ人女性に捧げると本に献辞が掲げられ、さらに、その葬儀の写真も添えられている。

そんな中、基本法の亡命権制限に踏み切る SPD 決議がなされようとしていた。デンマークにいたグラスは、ここでナチス時代に、デンマークが亡命してきたドイツ人たちを受け入れたことを思い起こす。その中には、後に西ドイツ連邦首相となるヴィリー・ブラントもいた。亡命権制限は、ナチス治世下、他国で寛大に受け入れてもらい、自国に帰ってから外国人にやさしい国を作ろうとした、こうしたドイツ人の亡命者たちを裏切ることである、とグラスは痛烈に批判する。(FW, S. 77f.) 彼が政治的活動を始めるきっかけも、1961年の連邦選挙においてアデナウアーが、首相候補だったブラントを「亡命者」「私生児」と呼んで、中傷したことだった。(FW, S. 77) そして、ブラントはそれ以来、ドイツにおいて、死ぬまで「外国人」のままだった、と彼は回想する。(FW, S. 77) グラスはこのように、亡命権制限反対の論拠を、やはり、歴史の連続性の中で捉えているのである。

グラスは戦後を振り返り、ここで民主的左翼はつぶれたとする。それは「過去の亡霊」、「化石」であり、最後の憲法愛国主義者は「やがて動物園の中で見られる」(FW, S. 83) だろう、と述べる。憲法に則った再統一を唱えていた少数派の知識人、ハーバースやクリストフ・ハインらとともに、グラス自身もこの「憲法愛国主義者」には含まれていた。ここからは、自分自身がまさに「マイノリティ」になっていることも彼は意識していることがわかる。また、この強引な再統一において、徹底して多文化主義的に民主主義を追求する彼の政治的態度と、「マイノリティ」に追いやられた東ドイツ市民の文化を擁護する姿勢とが重なってくることだろう。グラスはこの文脈において、この間に失われていったものの貸借表を作ってみせる。

彼の場合、まずあるのは「故郷喪失」である。ダンツィヒ生まれの彼は、敗

¹⁴ Grass, Günter: Rede vom Verlust. Göttingen 1992.

戦によってポーランド領となったことで、この故郷を失い、「東方難民」として西側に移住していった。しかし、彼はこの「難民」としての「喪失」を、文学的創作活動の原動力にすることができた。彼は実際、ここで「文学の前提としての喪失」(FW, S. 87) と、この「喪失」を捉え直してみせている。

グラスが次に挙げる喪失は、「政治文化」である。ブランドや大統領だったハイネマンなどの政治家が知識人と当たり前のようにつきあった時代を回想しているが、これもブランドの死(1992年)によって終わったとみる。(FW, S. 89f.) そこにまた、ジャーナリズムの画一化にみるような公論の多様性の「喪失」が付け加わる。新聞・雑誌については、「文芸欄の編集委員は取替えがきく」(FW, S. 90)と批判し、マスコミの抵抗精神の放棄を嘆く。これは、その後のグラスと『シュピーゲル』誌との確執へと発展していく。

こうした故郷喪失者として歴史や政治、マスコミを批判し、その代わりをしようとする姿勢は、彼自身の言う「歴史の埋め役」¹⁵としてのネガティブで批判的なスタンスにも通じている。その一方で、故郷を失い、移民・難民として生きざるを得なかった自らの経歴が彼にも「可動性」をもたらした。グラスはこの講演で、「故郷喪失によって私は、自由に他の結びつきを求めてゆくことができました。故郷を持つ人々が生まれてからずっと縛られている、土着しなくてはならないという強制は免れていました。場所をたやすく変えるということに喜びを見出すことが、なにより、異質なものへの好奇心を解き放ちます。故郷喪失者にとっては、地平線は、多かれ少なかれ、土地を所有して住んでいなくてはならない人々よりも、広いのです」(FW, S. 87)と述べている。ここでは、故郷喪失者となった境遇を、文学の面では柔軟な思考を生み出すことであると、グラスが肯定的に捉えていることは、注目してよいだろう。

こうしたグラスは、この間に大きくなったドイツ人の間の疎遠さが、結果的に外国人への憎悪を招いたとみる。(FW, S. 91) すなわち、ドイツ人は自らの中の「異質性」を認めず、それを外の異質な存在へ転嫁し、それを排除しようとしているというのである。したがって、ドイツ人に欠けているのは、異質性に対する開かれた感受性である。つまり、もっとも深刻にドイツに欠けているのは、異質なものの存在である。(FW, S. 94) 今、ドイツ人に求められているのは国境を自由に行き交う「Zigeuner (ジプシー)」と「その生き方」である、(FW, S. 96)ドイツ人にはたくさんの「喪失」の後、「ジプシー」(=ロマとシン

¹⁵ Grass, Günter: Als Schriftsteller immer auch Zeitgenosse. In: Gesammelte Werkausgabe in zehn Bänden. Bd. X, S. 928.

ティ) がいることは一つの「儲け(Gewinnen)」(FW, S. 96) であるとする。そして、マイノリティ性をこうして肯定的に捉えた上で、ロマ・シンティこそ「本物のヨーロッパ人である」(FW, S. 96) として、この講演を結んでいる。

ところで、こうしたロマ・シンティへの共感的態度はグラスの先輩作家ハインリヒ・ベルから受け継いだものでもある。ベルは 1983 年のダルムシュタット事件で市長に抗議するなど、知識人としてロマ・シンティへの差別と戦ってきた。グラスは「喪失について」において、このベルが自分の葬式に「Zigeuner(ジプシー)」の音楽を望んでいたことを講演の最後に付け加えている。(FW, S. 95f.)

次に、グラスの講演集『賛成・反対』における第三の講演「学ぶ教師」は、1999 年 5 月 13 日、ベルリンのフリッツ・カルゼン校での総合学校¹⁶会議に際してなされた講演で、教師たちの前で、主として教育の問題が論じられている。グラスはここではまず、学校と自分との関わりを、その生い立ちにまで遡って述べ、早くから学校を終え、軍隊に取られたがゆえに、「私の先生は戦争だった」(FW, S. 8) と述べる。自身、極めて偏った興味しか抱けずに、学校では落第生だったが、彼には学校に対して強いこだわりがあった。そこでここで彼は、自作の中に登場させた教師たちを挙げてゆく。彼らがそれぞれ、実在の教師たちをモデルとしていたことも明らかにする。学校教育は彼には、結局、戦争の経験と重なったが、その経験は彼に同時代に対して「懐疑の原則」(FW, S. 13) を当てはめることを教えたとする。

小説の中に登場させたさまざまな教師のなかで、グラスは特に、『かたつむりの日記から』に出てきた「疑惑」というあだ名の教師を思い浮かべ、さらに、価値としての「懐疑」について考え直す。(FW, S. 12) それは「原則的な価値」であるが、今や店ざらしになっている。(FW, S. 13) そのため、「所有の全体に対する義務」がないがしろにされ、脱税事件を招いている、とする。(FW, S. 14) 彼自身についても、従来の方の立場に対して「懐疑」を抱いていた例として、コソボ問題での NATO による空爆への支持の意見表明を取り上げる。そこでは、自分の今までの立場を見直してまでそれに賛成したのは、特に少数民族迫害のことを考えてのことだったと述べて、改めて自らのマイノリティ性を強調している。(FW, S. 16f.)

¹⁶ 1960 年代からグラスはこの学校制度を支持、息子の一人はこの総合学校の出身である。

現場の教師たちは、多文化的になる現代において、日夜、異文化に身を置く子供たちによって「引き裂き検査」(FW, S. 18)にさらされている。グラスはこの時代の教師たちに「同情する」と述べる。(FW, S. 19)しかしまた、一方で、外国生まれの異文化を背負った子供の増えるこれからの学校では、「学ぶ教師」が前提とされるとする。つまり、教師は、異なる文化を背負った生徒から異文化を学ぶべきだというのである。(FW, S. 25)たとえば、ピカレスク文学はスペインからヨーロッパ文学へと発展したとか、幾何学はアラブからヨーロッパが学んだものだと知るとは、脱ヨーロッパ中心主義にも通じてゆくだろうと論じ、異文化を背景にしたマイノリティから学ぶ姿勢がそうした自らの文化自体に内在する多文化性を意識する契機になるとする。さらに、その前提として「定められた地点をあえて後にする」(FW, S. 25)ことが教師には求められる、と主張している。

このように、1990年代のグラスは、外国人・マイノリティ問題をそれぞれの角度で論じている。社会に蔓延する排他主義や無謬性への固執、硬直化した思考パターン、ヨーロッパ中心主義、戦後は終わったとする保守主義的主張に対して、グラスは戦争に焼けどした「懐疑の世代」の作家として「懐疑の原則」を対置した。あるいは、故郷喪失者として、ヨーロッパ諸国における多文化社会の実現のために、絶えず自分の定位置を後にする勇気を説いた。そこには、もちろん、同盟の新国籍法(1998年、二重国籍容認)反対キャンペーンに対抗する意図もあっただろう。こうした多文化主義は、細部においては批判もするが、基本的にはSPD/緑の党の与党の理念との一致は明らかである。その一方で彼は、故郷喪失した「移民」は越境し、異質なものを結びつけ広い連関に開かれてゆく、彼等は自己相対化しながら別の連関で世界を見る広い視野を有する可能性を持つ、としている。

3 相対化するパースペクティブ/距離を取るナラティブ

グラスのマイノリティへのこだわりの理由としては、母親がスラブ系少数民族カシューブ人だったことが、まず考えられると先述したが、その他にも、以上みてきたように、戦争世代の作家として、歴史の流れに対し懐疑的に見ていること、そしてさらに、戦死者たちの声を「代弁」という作家としての使命を、社会的・政治的代弁者を持たぬマイノリティにまで広げて見ていること、機能不全に陥ったマスコミを作家として批判的に肩代わりすること、そしてまた、マイノリティに全的な人間性を補完し、現代における新しい多文化社会の構築に役立つ存在を見ていることも、このこだわりの要因と考えられた。

ところで、こうしたマイノリティへのこだわりは、単に SPD のための援護射撃という類のものではなく、グラスのより本質的な考え方に由来している。当然グラスの創作にも影響しているはずである。先行研究では、個々の作品におけるマイノリティ性の指摘として、たとえば、『ブリキの太鼓』をピカレスク・ロマンと捉え、その社会的アウトサイダーの視点を指摘したものに、クルムメがある。¹⁷ズィルバーマンは『犬の年』におけるアムゼルのユダヤ性を「別様であること」と捉えた。¹⁸『女ねずみ』におけるねずみを、ナチス時代の強制収容所の囚人とパラレルに見て、それを別な風に考えるために、目の前にある現実の危機を照らし出す視点となっているとしたのが、シュトルツである。¹⁹しかしながら、こうしたマイノリティ性が社会的相補機能を有するとする論究も、個別の作品論のレベルにとどまり、グラス自身のマイノリティ性との関わりで論じられているとはいえない。そこで、ここではグラスのこのマイノリティ性自体に注目し、それがいかに彼の文学活動に影響しているかを考察してみたい。

虐げられ、社会の周縁で抑圧されている者の側に立って行動・発言する姿勢は、倫理的なものであるばかりではない。少数派の側から見ることで、文学がいわゆる「歴史」を相対化する役割を引き受けざるを得ない、と彼は考えている。そこには「歴史の埋め役」としての作家の視点が見て取れると先述したが、それはまた、文学は敗者のために発言するものだという認識とも関連する。講演「文学と歴史」にはこうある、「文学の時代証人性にはより深い理由があります。文学は敗者たちに言葉をもたらすのです。歴史は作らないが、それでも歴史と分かちがたく直面してきた人々のためにです」。²⁰ここでは文学の「時代証人性」とは歴史の経過の中で確かにそれに関わりを持っているにもかかわらず、支配的立場から不当に無視されてきた人々（=敗者）を掬い上げ、歴史を補完するということであるとされる。

例えば、グラスは『鈴蛙の呼び声』で、ダンツィヒに戦後やってきた人々に

¹⁷ Krumme, Detlef: Günter Grass' Die Blechtrommel. München/ Wien 1986, S. 52.

¹⁸ Silberman, Marc: Schreiben als öffentliche Angelegenheit. In: Zu Günter Grass. (Hrsg. von Manfred Durzak) Stuttgart 1985, S. 86f.

¹⁹ Stolz, Dieter: Vom privaten Motivkomplex zum poetischen Weltentwurf. Würzburg 1994, S. 328.

²⁰ Grass, Günter: Literatur und Geschichte. In: Fortsetzung folgt.../ Literatur und Geschichte. Göttingen 1999, S. 57.

は、ヴィルノから追われてきた人々もいたという話を取り上げている。小説では「ポーランド・ドイツ・リトアニア」墓地協会というプロジェクトが設立され、故郷喪失者のために墓地を作ろうとすることになっている。²¹ダンツィヒにやって来た人も去った人も、等しく故郷喪失者として、それぞれの社会でマイノリティだったのである。ヴィルノにおいても状況は同じだった。

2001年の『記憶の未来』では、グラスがノーベル文学賞作家ミオウシュならびにシンボルスカとヴィルノで出会ったことが語られているが、ここではこの会合の開かれたリトアニアの首都が戦後ここを追われて故郷喪失になった者たちの記憶を新たにする場となっている。彼らはこのゆかりの地・ヴィルノでその記憶を未来に結び付けようとしたのである。グラスは特に、戦時中のマイノリティの境遇を思い起こすきっかけをここから得ている。「私たちは、迫害され、移住させられ、殺されたおびただしい数のユダヤ人たちのことは覚えているでしょうが、片や私たちは何万ものロマ・シンティたちが連れ去られ、殺害されたことは、その後になってやっと思い出したのです。多くの人々には遅すぎました。(中略)一括して恥辱と名づけられたこの悪行に時間的距離が大きくなればなるだけ、このたった十二年間の犯罪が、ますます重みを増してくるかのようです」²²と述べている。ヴィルノの歴史の中で埋もれてゆくナチズムの犠牲者となったマイノリティの記憶が、作家である自分には時間がたつとともにかえって思い起こされ、記憶の深部に埋もれつつある人々が自ずと思い出されてくるというのである。

故郷は違っても、同じ「移民」としての故郷喪失の「記憶」が、ここに集まった世界的な作家たちに、さらに自分自身の個人的な記憶を超えて、広くマイノリティ一般への共感をもたらし、彼らの個々の文学の原動力になっていたといえる。ちなみに、小説『鈴蛙の呼び声』ではドイツ再統一を相対化するのはダンツィヒだったが、このダンツィヒとドイツの関係をさらに相対化するものがヴィルノとダンツィヒだった。このように、幾重にも相対化する視点の取り方が、ドイツ現代史で看過されてきた歴史の裏面を垣間見させるのであり、この小説の場合も、この構想がグラスの作品構成の核となっていたと考えられる。

ところで、こうしたマイノリティ性へのこだわりが歴史や文化を補完し、文学成果にも結びつくとはいえ、実際になされる社会活動は、作家として必要な

²¹ Grass, Günter: Unkenrufe. Göttingen 1992. S. 95

²² Grass, Günter / Milosz, Czeslaw / Szymborska, Wislawa / Venclova, Thomas : Die Zukunft der Erinnerung. Göttingen 2001, S. 31f.

社会との距離を彼から奪ってしまう。そこで彼は文学的手法を工夫せざるを得なかった。その際、支配的言説に対して、いわゆる距離を取る文学的ナラティブで、歴史的な大事件を社会の周縁に位置する視点から捉え直している。また、自分自身の視点をも相対化し、自分に対する距離も確保しているのである。それが彼の作品にスケールを生み、多層的構築を可能にしていることも見逃せない。

この語り的手法については、大江健三郎との二度にわたる対談が示唆的である。1978年の対談では、大江の中央に対する周縁、王様に対する道化に文化的喚起力を見るという考えに、グラスはその場では賛同することに保留を示したが、彼が少なくとも、アウトサイダーに身を置くことに文学自体の力を見ていることも否定できないだろう。このアウトサイダー性もマイノリティへのこだわりの理由として考えられる。この対談で大江が当時の道化論のブームに乗って、中央に対して周縁性、王様に対して道化といった図式を持ち出しているのに対して、グラスは確かにそうした図式化自体には単純化してしまう点で懸念を示していた。²³ところが、同じく大江との1990年のフランクフルトでの対談²⁴（『群像』、以下、Guと略し、その頁数を示す）では、グラスは1978年の日本旅行とその際に行われた最初の大江との対談を回想して、当時、日本の地方を旅して、そこに「前近代的」な面とマイノリティの存在を発見したと述べている。（Gu, S. 294）この二回目の対談の時点では、彼は日本の中の周縁性とアウトサイダー性に文化的な力を見るようになっていたといえる。実際、1978年における最初の対談後、彼は大江が話した「在日」やアイヌ、被差別部落民の話から、日本でもマイノリティ問題が存在していることに強い関心を示していた。そのため、帰国後に書かれたエッセイ「ユートピアとの競争」で彼は、日本におけるマイノリティの問題として、被差別部落民のことを取り上げたのである。²⁵

²³大江健三郎/ギンター・グラス 「文学と戦争体験—地域性の力」 『海』 1978年5月号 321頁。ちなみに、フリューゲルは、『女ねずみ』の人類滅亡後からのねずみの世界を異化された現実と捉え、それを固定された現実を相対化する効果があるとし、大江と同様に、グラスとロシア・フォルマリズムとの類似を指摘している。Flügel, Arnd: Mit Wörtern das Ende aufschieben. Frankfurt a.M. 1995, S. 218.

²⁴大江健三郎/ギンター・グラス 「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学」 『群像』 1991年1月特大号。

²⁵Grass, Günter: Im Wettlauf mit den Utopien. In: Gesammelte Werkausgabe in zehn

この1990年の対談で、大江は対象に対して距離を取ることが物語を作る上では欠かせないプロセスであるという点で、グラスに学んだと述べている。(Gu, S. 316) 確かに、この時代、マルケスらのいわゆる「マジック・リアリズム」の文学が出てきており、こうした欧米の支配的世界に対して周縁的世界からの文学勢力のひとつとしてグラスを位置づけることも可能かもしれない。一方、ドイツ再統一をドイツからすれば周縁であるポーランドに視点を据えて見ようとしていた当時のグラスは、そのことに関して、それが作品構成における距離を取るナラティブから来ていることを明らかにする。(Gu, S. 318)『ブリキの太鼓』の完成には、ドイツの歴史から距離を取るため、パリに行く必要があったし、子どもの視点や犬の視点、ユダヤ人の視点を設けることで初めてナチズムの時代を表現することができたともいえる。また、ドイツ再統一をポーランドから見る視点から、『鈴蛙の呼び声』が生まれた。あるいは、アジアに身を置いたグラスは、そこではヨーロッパに距離を取ることが出来、『女ねずみ』では核爆発による破局へ向かう西洋文明を相対化する視点を手に入れた。こうしたナラティブは、メジャーなものに対して、作品の中でマイナーな立場、すなわち、中心に対して周縁の立場に視点を置くことによって可能になったとも言えるだろう。

さらにまた、講演「立場について」でも、グラスは作家の用いる手法として、「距離を取る」(FW, S. 36) こと、複数形で現実を捉えること (FW, S. 37)、大げさに言うこと (FW, S. 40) を挙げている。この講演では、再統一後のプロセスでそうした方法が、例えば「虐げられた人々の観点から、従って、どん底から書く」(FW, S. 46) という語りのパースペクティブをもたらしたと言う。この最底辺からのパースペクティブは、ときの権力者・支配者には批判的にならざるを得ない。そのため、否応なくグラスは、再統一による勝者たちの「朝食の邪魔」(FW, S. 47) をすることにもなったのである。

グラスはこのように、マイノリティに視点を据え、作品構成にスケールをもたらすことで、押し寄せる大きな問題に対して距離を取るパースペクティブを獲得し、その流れに抵抗しようとしてきたと考えられる。ことに、『女ねずみ』や『鈴蛙の呼び声』、『はてしない荒野』、『私の一世紀』などの彼の1980年代から90年代の大作においては、語り手もマイナーな立場の存在(ねずみ、アルヒーフの人々、主人公の学校の同級生)にあえて設定し、多角的な視点を取り入れることで世界を相対化し、作品を多層的に構築したことが顕著に見て取

れる。

彼のマイノリティ擁護の社会活動は、たしかに文学活動におけるその「マイノリティ性」とのかかわりで見ると必要があるだろう。しかし、また逆に、以上のように、マイノリティ擁護の態度が彼の文学的手法にも影響を与え、彼の作品の文体的特徴を成してきたともいえるのである。

グラスは、生まれながら、半ばマイノリティとして育った。このことと戦争におけるマイノリティ迫害の事実が、後のグラスにマイノリティへの感受性を培い、支配的言説への懐疑の態度を養った。現実が画一化し、絶対性にあぐらをかき始めるときこそ、文学は視点を変え、別の現実を示唆する。このように、グラスはその社会・歴史の中にいながら、ときにそれらの「埋め役」に回り、画一的世界を相対化し、全的人間性を映し出すという、いわばアウトサイダー的な機能を引き受けてきたのである。あるいはまた、社会と歴史の支配的言説による画一化傾向に対して、世界を相対化することは文学の本質でもある。したがって彼は、戦後は終わったという風潮に対しては歴史の連続性を、マスコミの政治への迎合と画一的言論に対してはマスコミ本来の批判的機能を、それぞれ文学が担うしかないとも考えた。その意味で文学はやはり、時代と社会の中にある。彼は社会の中であって、しかもその支配的言説に染まらず、別の真実を突きつける機能を文学に求めたのである。しかし、他方では文学自体に必要な現実世界への距離感がメディアの洪水の中、見失われかけていることも事実である。そこで、彼はあえてマイノリティの立場に視点を据えることを選んだのである。そして、文学の世界では、現実に対して距離を取るパースペクティブを工夫し、自分自身の視点をずらすことを自らの文体に取り入れることになったと考えられる。すなわち、そうした内なる距離を生み出す視点が、グラスにとってのマイノリティ性だったといえよう。彼は文学と自分自身が生き延びるための拠り所をマイノリティ性に求めてきた作家だったのである。